名所物見の旅　其の伍拾弐　黒部峡谷鉄道沿線の湯

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

剱岳から黒部峡谷への山旅のフィナーレとして、今回は黒部峡谷鉄道沿線に点在する温泉を紹介したい。麓の宇奈月温泉から先は一切の道路がない黒部の温泉を訪ねるには、黒部峡谷鉄道を利用するのが一般的な手段で、他には北アルプスの高峰を最低二日がかりで越えてくるしかない。

その昔、黒部峡谷鉄道トロッコ列車のチケットには“乗車に際し命の保障はいたしません”と注意書きがあったほどで、山峡を走る列車からは険しい断崖絶壁の迫力ある景色が楽しめる。黒部川第三発電所建設に於ける資材運搬の重要な動脈として敷設された黒部峡谷鉄道も、今では立山黒部アルペンルートと並ぶ富山県観光のドル箱となっている。

黒薙の後曳鉄橋を走る黒部峡谷鉄道トロッコ列車。この写真は鉄橋の近くに架かる水路橋からの俯瞰撮影で、川床から高度100メートルの水路橋は危険な為に現在は入口に金網が張られて侵入禁止になり、幻のアングルになってしまった。

宇奈月温泉

黒部峡谷の玄関口宇奈月温泉は、黒部川電力開発と共に発展してきた温泉である。大正末期から昭和の中頃までは、山中で命がけの工事に携わる労働者たちの息抜きのための歓楽的要素の強い温泉であったが、近年は黒部峡谷観光の要所として温泉ホテルが建ち並び、トロッコ列車が運行される4月中旬から11月いっぱいまで多くの行楽客が訪れる。宇奈月温泉の湯は上流の黒薙温泉から引湯され、宇奈月温泉のすべての湯をまかなっている。

黒薙温泉

黒薙温泉は宇奈月からトロッコ列車で24分の黒薙駅で下車。駅は切り立った断崖の中腹を切り拓いて作られ、ホームの先はすぐに鉄橋とトンネルが続く。黒薙駅周辺は沿線の中では一番山深い雰囲気が漂っている。温泉へはホーム脇の絶壁に付けられた階段から山道を行くのと、隧道内を通って温泉近くへ出る方法がある。山道の方は後曳橋を走るトロッコ列車の絶好の撮影ポイントがあり、この樹林の道は新緑や紅葉時は特に素晴らしい。温泉宿は駅から20分、標高50メートルほど下った黒薙川畔にひっそりと建っている。木造二階建ての年季の入った素朴な建物はとても風情があり、秘湯マニアには是非ともお勧めしたい宿である。

黒薙温泉の歴史は古く、江戸時代の正保二年（1645）湯が湧き出ているのを発見され猟師らの知るところとなっていたが、慶応四年（1868）に開湯され山峡を越えて湯治に訪れる人が見られるようになった。黒薙温泉は高温で大量の湯量を誇り、黒タイル貼りの内湯には熱い湯が常に溢れている。川畔には大きな露天風呂があり、湯船の真ん中には巨岩が鎮座している。

私は黒薙温泉とは長いつきあいで、撮影に夢中になって帰りが遅くなり心配した温泉宿のおばさんに叱られたり、顔馴染みになった黒薙駅の駅員さんが弁当を持っていなかった私のために自分の昼食用のパンを分けてくれたことなど、懐かしい思い出も多い。

黒薙川畔にひっそりと建つ黒薙温泉は人里離れた静けさと鄙びた雰囲気に包まれている。湯は江戸時代正保二年に発見され、開湯は慶応四年という古い歴史がある。

鐘釣温泉

鐘釣温泉は宇奈月から55分。駅脇に鐘釣美山荘、川原へ下っていくと鐘釣温泉旅館がある。川原には人気の露天風呂や洞窟風呂が点在し、途中下車して日帰り入浴に訪れる客も多い。付近の錦繍関は沿線随一の紅葉の名所で、燃えるような紅葉と鉄橋を走るトロッコ列車を撮影しようと、シーズンには多くのカメラマンが三脚を並べている。昭和三十年代中頃に鐘釣温泉に泊まったある作家の日記を読んでいたら、宿の食事は缶詰ばかりだとの嘆きが載っていたが、今では露天風呂のお蔭で人気の温泉となり、食卓には山菜や川魚を中心とした山の宿らしい食事が並ぶ。

欅平温泉（猿飛温泉）

黒部峡谷鉄道終点の欅平駅は宇奈月から1時間20分。駅のすぐ近くに欅平温泉猿飛山荘がある。宿の目の前には名剣山の岩壁が聳え、深い渓谷が迫ってくる。猿飛の名は猿が飛び交うほどに谷の両岸が狭まっている近くの名勝“猿飛峡”に由来する。周辺は猿も数多く生息し、昨秋訪れた時も数匹の猿が木々の間を飛び跳ねていた。昼間は観光客で賑やかな欅平も、17時25分の最終列車が出た後は深山の静けさに包まれ、自然を満喫できる。最近では欅平温泉と呼ばれているが、昔から通っている登山者には猿飛温泉の名の方が馴染みがある。

名剣温泉

欅平から15分ほど祖母谷沿いに遡ると名剣温泉がある。一軒宿の名剣温泉旅館から祖母谷を見下ろすと、上流は明るく広がり下流は岩壁が迫って、美しいコントラストを見せている。この宿は「日本秘湯を守る会」の登録旅館で、岩で囲われ手入れの行き届いた露天風呂はとても心地よく、夜はランプの光が風情を醸し出している。

祖母谷温泉（ばばだにおんせん）

祖母谷温泉は名剣温泉からそのまま林道をだらだら登って長いトンネルを抜け、風景が開けてほどなくの祖母谷（ばばだに）と祖父谷（じじだに）の出合いの川畔に建っている。欅平から徒歩50分。祖母谷温泉は山小屋として営業しているので、混雑時は相部屋になることもある。ここは黒部側から白馬岳や唐松岳への登山基地であるが、どちらに登るにせよ距離が長いので熟達者向きといえる。

広い湯船に硫黄泉が溢れる祖母谷温泉露天風呂。祖母谷温泉は登山者や本物志向の秘湯マニアに人気の山の湯宿である。

我が敬愛する写真家・田淵行男が昭和初期に撮影した祖母谷温泉の写真を見て、その素朴さに長年行ってみたいと憧れていたが、私が初めて訪れたときには場所も建物も変わってしまっていた。宿で聞いた話では明治の中頃には既に湯治用の大きな建物が建てられていたと言うから、昔から湯治客で賑わっていたことが窺われる。岨道しかない辺境であった祖母谷温泉まで来るには、相当な困難を伴ったであろう明治時代に、立派な湯治場があったことは驚きであった。

祖母谷温泉の湯は、宿から一段降りたところに男女別の大きな露天風呂がある。湯は近くの祖母谷地獄から引湯の単純硫黄泉で、湯船の中は湯の華がたくさん漂い泉質の濃さを物語っている。また宿の中の内湯はこの場所に湧く湯で、露天風呂の湯とは明らかに泉質が違う。私は内湯のやさしい湯がとても気に入っている。祖母谷温泉のもうひとつの魅力は祖母谷地獄の川原の温泉で、スコップで穴を掘って自分だけの露天風呂を作ることが出来る。試しに挑戦してみたら、とても熱くて入れない。うまい具合に沢の水を引き入れないとなかなか適温にはならず、案外難しいものであった。

最近祖母谷温泉の女将さんと話していて、彼女が源治郎爺さんのひ孫だと知って驚いた。剱岳の名ガイドとして大正から昭和にかけて活躍した佐伯源治郎は、剱岳南東に伸びる源治郎尾根にその名を残し、大山村の宇部長次郎、芦峅寺の佐伯平蔵と並び称される剱岳の勇者であった。関連書籍やネット情報では源次郎と表記されていることが多いが、英文学者の田部重治が雇った伊折の山案内人・沢崎源次郎を第三者が混同して誤り伝え、現在に至っているようだ。源治郎尾根の佐伯源治郎は芦峅寺出身で、大正13年剱沢小屋を建て、戦後亡くなるまで番人を務めていた。

未来に残したい雄大なる黒部峡谷の自然

私が初めて黒部ダム（黒四ダム）を訪れたのは昭和44年（1969）のことで、まだ立山黒部アルペンルートも全線開通されていなかった。そのとき仰ぎ見た残雪抱く立山連峰に憧れ、この山域に足繁く通うようになった。また湖畔の慰霊碑「尊きみはしらに捧ぐ」によって黒四工事の犠牲者が171人にも上ることを知り、当時放送されていた裕次郎の連続テレビ映画「黒部の太陽」の印象がより暗いものに変わったことを覚えている。黒部ダムは戦後の復興を象徴する大工事であるが、それは多くの犠牲の上に成り立っていたのであった。加えて今回の連載で取り上げた黒部第三発電所建設の高熱隧道や仙人ダム工事では300人以上という驚くべき犠牲者を出していて、こちらは戦前の闇とでも呼べるかもしれない。

しかし今、黒部峡谷は何事もなかったように多くの観光客を迎え、雄大な自然はシーズンを通じて圧倒的な美しさで我々を魅了している。その自然の奥深さは訪れるたびに新たな発見があり、私を飽きさせることはない。願わくばこれ以上開発されることなく、黒部の自然をいつまでも残してほしいと思っている。

祖母谷地獄の川原に掘った自作の温泉。湯の温度調整が難しく、なかなか適温にならない。